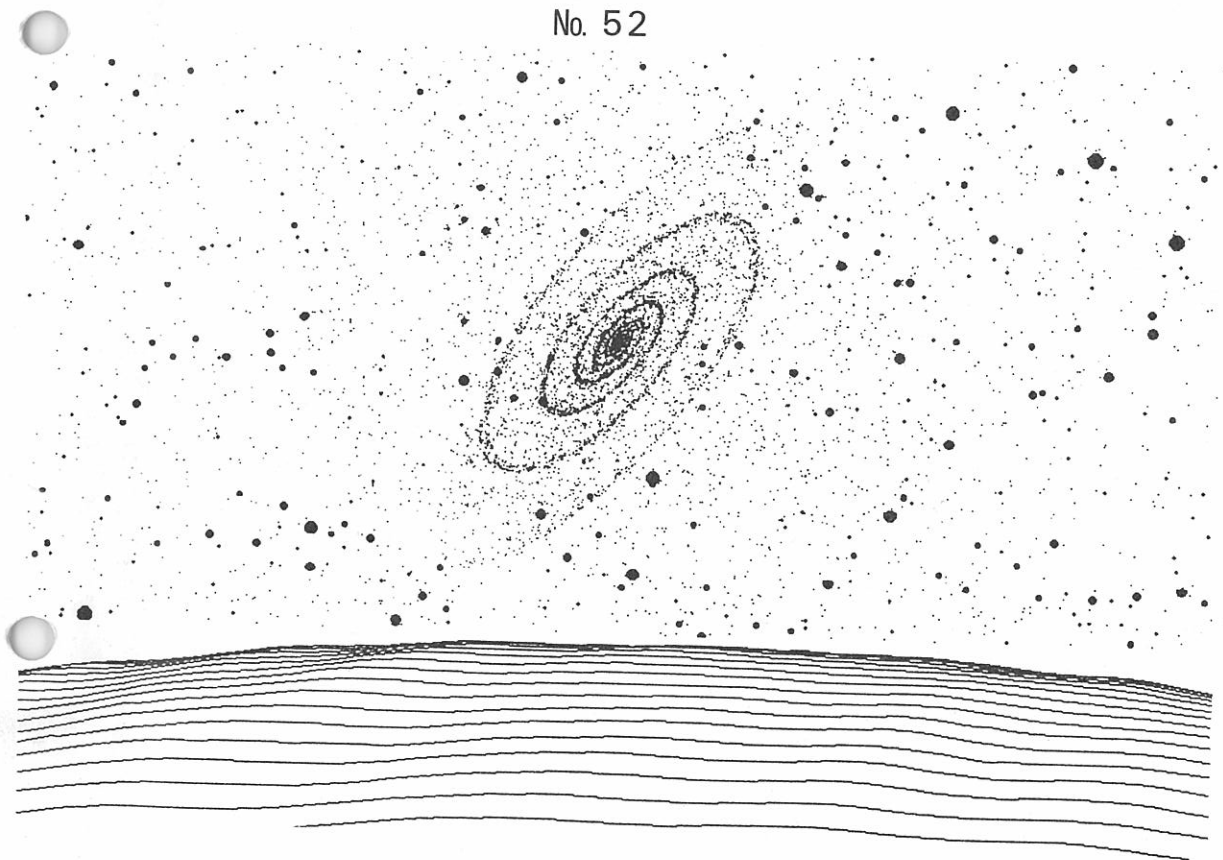


# 光学天文連絡会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

## 会報

No. 52



1989-4-18

光学天文連絡会事務局  
(大阪教育大学天文学研究室)

## 目次

I. 1989年度運営委員選挙結果	2
II. 1989年度光天連絡会(ご案内)	2
III 第52回運営委員会報告	3
IV. 天文学研究連絡委員会(14期第2回)会議メモ	4
V. 天文学研究連絡委員会(14期第3回)会議メモ	6
VI. 第2回国立天文台運営協議員会議(メモ)	7
VII. 第3回国立天文台運営協議員会議(メモ)	8
VIII. JNLTシンポジウム開催に関する報告	9
IX. 第2回研究交流委員会報告	10
X. 第2回光学赤外・太陽専門委員会議事録	11
XI. 第2回観測プログラム小委員会議事録	13
XII. 体制ワークショップ報告	14
XIII. 国立天文台内望遠鏡WG会合記録(11)	16

I. 1989年度光天連運営委員選挙結果

1989年度の運営委員選挙は2月20日から3月15日までの期間に郵送によって投票が行われました。開票の結果は以下の通りです。(事務局)

1.	小平桂一	51	票	有権者数	261
2.	岡村定矩	49		投票者数	95
3.	家正則	45		有効票数	886
4.	若松謙一	44		白票	64
5.	小暮智一	41			
6.	舞原俊憲	37			
6.	平田龍幸	37			
8.	田村真一	35			
9.	磯部瑠三	34			
10.	定金晃三	33			
11.	安藤裕康	28			
12.	田中 济	27			
13.	兼古 昇	26			
14.	前原英夫	24			
15.	谷口義明	21			

次点

関 宗蔵	19
佐藤修二	18
野口邦男	17

(1989年3月17日 開票、於：京都大学理学部物理学教室)

II. 1989年度総会について

ご案内

光天連第12回総会

光天連第12回総会を次の予定で開催いたします。会員の皆様のご参加をお願いします。

1. 日時： 1989年5月16日午後6時より約1時間30分
2. 場所： 東京大学山上会館ホール(学会春期年会A会場)
3. 議題： 88年度会務報告、会計報告、活動報告、89年度体制、活動方針、その他

III. 第52回運営委員会報告

日時：1989年4月6日 午前11時 - 午後5時30分

場所：東京大学理学部天文学教室会議室

出席者：家、磯部、岡村、兼子、小暮、小平、田中、田村、平田、舞原、若松、定金、浜部

議題：

1. 諸報告

- A. 1989年度運営委員選挙結果報告(前ページ参照)、1989年3月末時点での会務報告、同じく3月末時点での会計報告が事務局からあった。
- B. 各ワーキング・グループの報告
  - 望遠鏡W. G. : 田中、舞原両世話人から各サブグループの活動のまとめの報告があり、今後、各観測装置でのサイエンスとそれらの立ち上げの順序を議論する必要があることが指摘された。
  - 体制W. G. : 関世話人(当日欠席)の報告書(本会報14ページ参照)にもとずき、今後の課題などについて意見を交換した。
  - ユーザーズ・コミッティ: 定金世話人から、主として岡山のプログラム問題に関する本年度の活動と、それにたいする国立天文台の対応について報告した。
  - データ解析W. G. : 平田・若松両世話人から基本方針とそれらの実現のための方策について報告された。
- C. 国立天文台状況報告
 

小平氏から共同利用関係(研究会、共同研究、計算機利用、観測所の運営、各委員会の予定、人事公募など)、JNL T関係(調査研究経費、1990年度概算要求方針、技術的詰め、OSDA、ミニサミットなど)、そのほかについて報告があった。
- D. その他として、小暮氏から天文研連の報告(本会報4および6ページ参照)、また岡村氏から2月12日の光学赤外・太陽専門委員会の報告(本会報11ページ参照)があった。

2. 1988年度活動報告案について

小暮運営委員長より原案が提示され、それを審議した。出された意見をもとに原案を修正し、総会に報告することが了承された。

3. 1989年度の体制について

1989年度には運営委員長のほかに副委員長をおいて運営にあたることを決めた。運営委員長候補として小暮氏を、また副委員長候補1名を早急に決め総会に提案することになった。

1989年度の事務局は木曾観測所におき、事務局長には浜部氏をあてることを総会に提案することになった。

また、各W. G. 等の世話人とメンバーについて候補者のリストを作った。

4. 1989年度活動方針案について

小暮運営委員長より原案が提示され、それを審議した。新しく運営委員になった人の意見も求め、総会前に新旧合同運営委員会を開いて方針案を決定し総会に提案することになった。

#### 5. 総会の準備について

1989年度総会は5月16日(火、学会春期年会初日)午後6時から学会A会場(東大山上会館ホール)で開くことを決めた。議長は平田氏に依頼することにした。

#### 6. 1990年度海外学術研究の申請方針について

1990年度の申請締切が今年5月はじめであることから光・赤外関係での方針を議論した。それにさきだち、木曾観測所長石田氏からの手紙が紹介された。90年度の方針としては、総轄的な大きいもの一件にまとめること、また特色あるプロジェクトについては個々に申請することを決めた。大きい一件については早急に代表者を選び依頼することにした。

### IV. 天文学研究連絡委員会(14期第2回)会議メモ

上記研連の会議が1988年12月21日に開かれた。光学赤外関係及び大学における天文学を中心に概要を報告する。

#### 1. 諸報告のなかから

- 天文学データセンターの業務を金沢工大から国立天文台(天文学データ解析計算センター)に移管した旨IAUに報告。
- 学術会議第14期活動計画(天文月報、1989年2月号参照)。第4部からは国際関係(学術会議の小規模国際集会へのサポート等)、研究者養成、基礎科学振興について要望がでている。前期は第4部報告にとどめられたが、今期はあらためてまとめ直す方針。

#### 2. JNLT関係

- 国際シンポジウム JNLT and Related Engineering Developments (1988年1月29日-12月2日)の経過と成果について小暮と小平氏から報告、それに関連して種々の意見が交換された。
- 予算化について。欧米では安く出発してあとから追加する。日本では計画を始めからfixして予算をつける。
  - JNLT予算見積が高すぎる。努力が必要。
  - JNLTがコスト高になる点については正論を主張すべきだ。
  - 光・赤外についてどれだけ新味がだせるか。なぜいま光なのかという点について工夫が必要。
  - JNLTも重要だが電波ヘリオグラフも今回のSolar Activityにむけて緊急性が高い。64年度にはJNLT、ヘリオグラフ共に予算化が見送られた。電波関係としては危機感をもっている。

#### 3. ミニサミットと国際協力について

1988年10月17-18日にワシントンで開かれたミニサミットのJoint WG on Ground-Based Astronomyの会合に出席した小平氏から報告があり、大型装置に関

連する国際協力について意見交換があった。

- 大型装置は名目ほどopenではない。
- Einstein, IUEはopen(ただし、Selection Committeeはopenでない)。

#### 4. 天文学の動向と研連の取り組み

- 文部省から最近「学術白書」が出ていない。科学技術白書(科学技術庁)の中に天文学が1頁含まれている。天文学の動向についてもっとアピールすることが必要である。
- 天文研連としても大型計画(JNLT, 電波ヘリオグラフ)の実現のためにアピールが緊急に必要。
- 次回にどうすればよいか、問題点を整理するための世話人を杉本、田原、磯部の各氏に委嘱した。

#### 5. 大学における天文学研究・教育の充実

研連に先立つ午前中に開かれた大学関係者の懇談会について小暮から報告、次の点について問題提起を行なった。

##### I. 国立天文台と大学

国立天文台発足後の両者の新しい関係

##### II. 大学院教育

併任方式、総合研究大学院方式の問題点

##### III. 大学における施設・設備の充実

これらについて意見の交換があり、大学における研究・教育の充実の重要性についての認識にたつて天文研連として何ができるか、文書等でPRするとしたらどのような内容にすればいいか、次回までにたたき台をつくることになって、その世話を小暮、内田、田原の各氏に委嘱した。

#### 6. 各大学における諸計画について

次の大学から現状が報告された。

北大(坂下): 講座増要求、大学院構想として理学院要求

東北大(竹内): 大講座制と客員部門、基礎情報科学専攻への参加構想、新専攻への改組、講座増

東大(尾崎): 理学部附属センター発足、理学院構想、客員大講座(10部門)要求(祖父江): サブミリ望遠鏡計画、60cmサブミリ鏡試作

名大(松本): 宇宙分子サブミリ波観測装置計画、「スペースアストロノミー研究設備」構想、客員講座(国立天文台、宇宙研対象)要求

京大(小暮): 中口径光学赤外線望遠鏡計画、宇宙理学講座(客員大講座)要求、大宇陀の現状紹介

これらについて推進をはかるため、前記の研連としての取り組みのなかで考えていくことになった。

(文責: 小暮)



V. 天文学研究連絡委員会（14期第3回）会議メモ

1989年3月29日に上記会議が開かれた。要旨を報告する。

1. 電波ヘリオグラフ建設計画にアピールについて

重要性、緊急性についての説明のため甲斐、鮎目両氏が出席した。そのあと、JNL Tの重要性、緊急性との整合性、研連としての取り組み、などについて議論があり、JNL Tは別途計画推進がはかられているので今回はヘリオグラフとしてアピールを出すことになった。

2. 「地上天文学に関する国際ワーキンググループ（第3回）」の報告（小平）

このWGは1989年3月3-4日にEROで開かれ、日本からは古在国立天文台長、小平国立天文台教授、本間文部省研究調整官が出席した。今回はこれまでの報告にもとづいてミニサミットに対する報告書の作成が議論され骨子が固まった。「推薦」としては、第1位に大型光学赤外線望遠鏡（JNL Tを含む）、その他にVLBI、重力波検出器の共同開発などが含まれている。

3. JNL T計画について小平氏からの現状報告に続いて意見交換があった。特に、JNL Tの建設コストが問題になり、コストダウンのための努力について議論があった。

4. 大学における天文学研究・教育の充実について

小暮から内田、田原両氏との3者の話し合いについて報告され、問題点の整理および天文研連として文書を作る場合の骨子が紹介されたが、時間がなく継続審議となった。

（次回は9月29（金）の予定）

（文責： 小暮）

VI. 第2回国立天文台運営協議員会議（メモ）

昭和63年12月19日国立天文台において上記の会議が開催された。その要旨を報告する。

1. 国立天文台人事について

（1）次年度の人事について： 停年退職等に伴う来年度の人事について、定員削減、技官の処遇等について台長からの説明を了承し、次年度公募できる教官3名については分野選定委員会に分野の選定を委託することになった。

（2）平林氏の転出に伴う後任人事について： 分野選定委員会からの報告にもとづいて、電波天文学分野の助教授（VLBI担当）として公募し、公募の結果助教授として適任者がいない場合には、助手として採用することもありうることを了承した。このための人事委員会委員として、（台内）森本、笹尾、家、（台外）奥田（宇宙研）、田原（宇都宮大）を選出した。

（3）「運営協議員会議における人事の取り扱いについて」の台長説明と、「人事の進め方について」（池内私案）についての説明および意見交換があり、天文台内でさらに議論し整理の上、次回再提案することになった。問題になったのは、教官および技術系職員の選定手続き、運営協議員会議における選考および決定の手続き等である。

2. 総合計画専門委員会について

委員会に取り扱い事項（長期的研究・教育計画、臨時事業費、その他将来計画などの案）、研究交流委員会との関係、委員の構成等について意見の交換があり、次回に再び議題とすることになった。委員からは、長期的視点に立ち、10-20年先をみた若い人に期待したい、系にとらわれない議論が必要などの意見がでた。

3. その他

- 研究交流委員会、各専門委員会からの報告
- JNL Tシンポジウム開催の報告
- 地上天文学に関するWG（ミニサミット）からの報告

（文責： 小暮）

Ⅶ. 第3回国立天文台運営協議員会議（メモ）

1989年2月21日東京大学山上会館において上記の会議が開催された。その要旨を報告する。

1. 台長諸報告

○国立天文台評議員名簿 ○最近の人事 ○平成元年度予算内示

2. 人事について

- (1) 電波天文学助教授人事：人事選考委員長からの報告にもとずいて審議し、川口則幸氏を選任。
- (2) 技術系職員専門委員会から推薦された助教授（名取、水垣、原、子熊氏）および助手（湯谷、小矢野氏）を承認。
- (3) 研究交流委員会から推薦された候補者について審議し、次の各氏を選任。

外国人客員教授

光学赤外線天文学研究系	----	P. R. Gillingham	AAO 副所長
電波天文学研究系	-----	W. M. Irvine	マサチューセッツ大学 五大学電波天文台長

国内客員教授

太陽物理学研究系	-----	牧田 貢	京都大学教授
理論天文学研究系	-----	中沢 清	東工大教授

国内客員助教授

光学赤外線天文学研究系	----	小鍛冶 繁	工業技術院 機械技術研主任研究官
地球回転研究系	-----	杉本 裕二	通信総合研 鹿島支所主任研究官

(4) 分野選定委員会からの報告

1989年度に公募できる教官3名について、次の結論が報告された。

- a. 光学赤外線天文学研究系の教授1名、および教授または助教授1名を公募する。  
[大型望遠鏡計画推進のため緊急に人材の確保が必要とされることが考慮された]
  - b. 第3の公募（助教授または助手）については、いくつかの研究系、センター等から要求が出ている。もう少し時間をかけて検討する。
- これらについて了承。aについては公募に入ることになり、人事選考委員会（2件を一括して扱う）を次の通り設置した。

台内委員： 小平（世話人）、海部  
台外委員： 小暮、内田、杉本、奥田

(5) 技術系職員から内部昇格によって補充する教官人事については、これまで技術系専門委員会で選考し、幹事会にはかつて候補者を選任していた。これについて、何故外部からの参加を考えないのかという点の指摘があった。技術者の業績評価、役割評価が外部からは難しいという台内からの意見もあったが、人事をオープンにするためにも、review的会合には外部からの参加の必要性が了承され、中川委員、中沢委員が参加することになった。

3. 総合計画委員会の設置について

台長からメモの形で「総合計画委員会の仕事」の提案があった。それによると、○総合計画委は広い視野に立って国立天文台の研究活動や将来計画などについて考えることを任務としている。  
○当面の目標としては国立天文台の構想素案を改訂することにしたらとの提案があり、総合計画委もこれに合意すれば、これに取り組むことから始めてもらいたい。  
このような提案をもとに意見交換があった。特に第2点については、構想素案はまだ改訂は早すぎるのではないかと、それにとらわれずもっと広い視野から自由な議論が望ましいなどの意見が出されたが、委員会設置が了承され、連記投票によって次の委員を選出した。

台内委員： 吉澤、家、石黒、池内、桜井、佐藤（修）、笹尾  
台外委員： 高原、長谷川、岡村、若松、福井、長瀬、野本  
なお、委員長は平山企画調整主幹が当たることになっている。

4. 各専門委員会報告（略）

（文責： 小暮）

Ⅷ. JNL Tシンポジウム開催に関する報告

既報（天文月報1989年3月号、56ページ）の通り、JNL T国際シンポジウムが1988年11月29日～12月2日に東大山上会館で開催された。天文月報に報告されているように各方面にわたって多大な成果を得ることができた。

会計面でも各財団、企業のご援助を得て、招待外国人の旅費支給を行なうことができた。また、国立天文台の研究会補助金を得ることができ、会場の借り上げ費用等を支出することができた。

JNL Tシンポジウム組織委員会  
幹事 磯部 瑋三

## IX. 研究交流委員会報告

研究交流委員長海部宣男氏から、運営協議員会議に対し次のように報告されたので転載する。(小暮)

### 第2回研究交流委員会報告

1989. 2. 21

国立天文台運営協議員会議資料  
研究交流委員会委員長 海部宣男

1989年2月13日、第二回研究交流委員会が開かれ、概略以下のような討議・決定を行なった。

- 1) 1988年度の共同利用について  
研究交流委員および各研究系を通じて共同研究などの追加要求をきき、16件・106.7万円の追加配分を決めた。なお若干予想される残額については、既定方針どうり研究交流委員長の判断に委ねる。
- 2) 1989年度の共同利用の方針について  
委員会に付託される研究員等旅費の配分については、a. 分野別配分、b. 公募分、c. 保留分、の3つに分けて考える。a. については、今年度観測所に配分したが、各研究系(関連観測所を含む)に対して、申請と実績に応じて研究交流委員会が決定する額を配分することにしたい。各専門委員会の定める方法によって研究系(関連観測所を含む)ごとに使用し、フレキシブルに状況に応じて運用できるようにする。各研究系は、年度ごとの使用状況を研究交流委員会に報告する。b. では、研究会、ワークショップ・共同研究を年1~2回公募する。共同利用研究費については、a. 共同利用の研究環境整備、b. 研究を公募する、等が考えられる。b. については、積極的に考えたいが、要求などをみて、5月の委員会で決めたい。  
その外、共同利用研究者の便宜のためのマニュアル整備などの要望があった。
- 3) 1989年度の客員教授・助教授候補者について  
外国人客員教授2名、国内客員教授2名、同助教授2名の定員に対し、それぞれ3名、3名、4名の希望が寄せられ、審議の結果、別紙の候補者を運営協議員会議に提案することになった。なお、候補希望者は早めに準備する必要がある。
- 4) 委員会に役割と年間スケジュールについて  
別紙資料に基づいて議論があり了承された。
- 5) その他  
国立天文台の研究員制度の可能性について検討した。具体的要求など、よく検討の必要があり、夏の委員会でさらに考えることになった。  
総合研究大学院について資料を配布した。今後委員会でも議論を深める。

## X. 第2回光学赤外・太陽専門委員会議事録

### 1. 日・場所

平成元年2月13日(月) 14:00-17:30

国立天文台講義室 (東京都三鷹市大沢2-21-1)

### 2. 出席者

海野、岡村、尾崎、辻、椿、舞原、若松、(以上台外委員)、日江井、山下(以上台内委員)、田鍋浩義、西村史朗、安藤裕康(以上オブザーバ)、山下芳子(研究協力係)  
(欠席 小平、吉村、牧田委員)

### 3. 議事

・冒頭に前回の議事録を承認した。

#### (1) 光学赤外線天文学研究系・太陽物理学研究系及び関連する観測所の報告

- ・山下委員より、光学赤外線天文学研究系の活動について報告があった(助手2名採用、JNLT等)。昨年末のJNLT国際シンポジウムの報告及び、国立天文台の協賛に対する謝辞があった。
- ・日江井委員より、太陽物理学研究系の活動について報告があった(太陽活動周期望遠鏡計画、Solar-A、ベクトルマグネットグラフ、太陽面精密測定、モノクロ撮影用望遠鏡更新計画、助手1名採用等)。
- ・日江井委員より、乗鞍コロナ観測所の報告があった(同所の経緯、機器の利用、人員構成、最近の観測成果等)。
- ・山下委員より、岡山天体物理観測所の報告があった(観測プログラム遂行、所長預かり時間の配分、人員構成、外国人研究者受け入れ、観測環境変化への対応等)。
- ・プログラム小委員会委員長の西村氏より堂平観測所の報告があった(共同利用開始とその遂行状況等)。
- ・太陽活動世界資料解析センター長の田鍋氏より、同センターの経緯と活動状況について報告があり、4月以降のセンター長の人選について諮られた。審議の結果日江井氏をセンター長候補者として推薦することとした。



- ・JNLT準備室の安藤氏より、JNLT計画の進展状況について報告があり、質疑が行なわれた（望遠鏡、施設、概算要求、人員要求等）。

(2) 岡山天体物理観測所等の観測プログラム編成の基本方針について

- ・西村氏より、前回の専門委で出されたscreening についてプログラム小委で検討した経過が報告され、レフェリー制の導入を骨子とする基本方針（第2回観測プログラム小委員会議事録参照）が提案され、これに基づいてレフェリー制及びその運用方針について意見の交換が行なわれた。
- ・審議の結果、プログラム小委員会の提案が承認された。
- ・プログラム小委員会より、小倉勝男氏（国学院大学）を同小委員会のメンバーに加えない旨提案があり承認された。

(3) 小委員会の設置について

- ・岡村、山下委員より、それぞれ共同利用のユーザ側、ホスト側の立場から装置計画小委員会を設置したい旨提案があり、提案理由の説明後、同小委員会の役割等について意見を交換した。
- ・審議の結果、装置計画小委員会の設置が承認された。台内委員3名（西村史朗、佐藤修二、家正則）、台外委員3名（大谷浩、田中済、舞原俊憲）が提案され承認された。

(4) その他

- ・岡村委員より、海外の大望遠鏡を利用する為の旅費を国立天文台の概算要求で出す可能性を調べたいとの提案があり、諒承された。
- ・山下委員より、昨年同様観測天文学シンポジウムを国立天文台でサポートして欲しいとの要望が出された。
- ・次回は6月頃の開催を検討する（未定）。

（文責： 岡村）

X I. 第2回 観測プログラム小委員会 記録

日 時：1989年1月27日 午前10時～午後4時

場 所：国立天文台（三鷹）会議室

出席者：西村史朗（委員長）、岡村定矩、小平桂一、桜井 隆、定金晃三、前原英夫（幹事）  
小倉勝男、山下泰正、菊池 仙

議 事

1. 委員会の構成

委員長の西村氏から委員会の構成および今回の出席者について説明がなされた。小倉氏については今回も正式の委員と同様に議論に加わっていただく。（光学赤外・太陽専門委員会に対して本小委員会の委員として追加していただくよう要請している。）また、山下氏と菊池氏は、共同利用による観測プログラム編成等について報告や討議のため出席していただく。

2. 岡山の1989年後期観測プログラム編成

岡山の188cm望遠鏡の有効利用を計るため、観測申込に対してスクリーニングを実施する方向で議論が進められた。まず、岡山の望遠鏡特に188cmは現存の基幹望遠鏡であり、天文学・機器開発・教育等の観点から多様な要請があることが確認された。そして、個々の観測申込について星・銀河等に分類してレフェリーへ評価を依頼し、その結果に基づいて本小委員会がプログラムを編成する、という基本方針が了承された。レフェリー評価は、(1)科学的価値、(2)計画の完成度、(3)総合評価の3項目について5段階で行うものとし、観測申込およびレフェリー評価の書式等については、ここで行われた議論をもとに具体案を作成することとなった。なお、他の望遠鏡については従来どおりの方法でプログラム編成を行う。これらの結論については次回の専門委員会（2月13日開催予定）で討議・承認していただく。

3. 堂平の報告

菊池氏から、堂平の現況について報告があった。共同利用は天候のよい10月～3月とする。今回の共同利用期間は1月～3月の延べ82夜で、91cm望遠鏡に約1.9倍の申込があり、シェアの夜を作って割り付けている。

4. 今後の日程

プログラム編成に関連する今後の会合および作業の日程について話し合われた。

2月13日	光学赤外・太陽専門委員会。（スクリーニングについての討議）
3月上旬	プログラム公募用紙発送、国立天文台ニュースにお知らせ掲載。
4月15日	“ 縮切。
：	仕分、レフェリーへ発送。
5月15日	レフェリーレポート縮切、整理。
：	プログラム小委員会、プログラム編成。
：	光学赤外・太陽専門委員会、プログラム承認。
6月上旬	プログラム発送、国立天文台ニュースに掲載。
7月10日頃	1989年後期観測開始。

（文責： 前原）



## 体制「Work Shop」の報告

(世話人) 大谷、安藤、関

【日時】 1989年1月25日 13:00 - 26日 17:00

【会場】 国立天文台(三鷹) 輪講室

【参加者】 安藤、家、泉浦、磯部、稲谷、大谷、小倉、尾中、兼古、小平、  
佐藤(修)、関、田中(済)、中桐、西村、能丸、野口(猛)  
平田、舞原、前原、宮下(暁)、湯谷、吉田(重)、渡辺(悦)。

【テーマ】 JNL Tの共同化に必要な

i) システムや環境及びそれらの作り方、

ii) 機器開発の場所と国内観測体制、

の検討

【報告及び議論の概要】

\* 世話人からの基調報告(「会報」No. 51, pp. 23-24)の後、テーマ i) について家、佐藤両氏から報告があった。家氏は「天文台内からみて、いま一番必要なことは{分野間、機関間、国家間}の協力と分業体制の確立である。そのためには、天文学関係者の意識改革を前提に、①機器開発やソフト開発への寄与を積極的に評価すること、②台外からの共同作業への参画の道を具体的に探ること」を求めた。若松氏からは「台外からみて①NAOと大学によるデータ解析システムの開発、②基幹大学の育成、③Hawaii観測所に対する大学の支援、の重要性」を強調するメッセージが寄せられた。佐藤氏は赤外線天文学の立場から、「よいテーマ、生き生きした目標で動機づけをおこない、小さなプロジェクトを成長させる”微分型”で若手を養成することが重要である。この過程で手仕事のできる人間を育成することがJNL Tの建設時に必要である」と主張した。

\* テーマ ii) に関連して安藤、舞原、稲谷、前原の各氏の報告またはコメントがあった。安藤氏は(JNL Tたち上げ以後における)機器開発のFlow Chartを示し「問題は、今からたち上げ時までのPhaseでの体制で、NAOのコアとしての三鷹の充実が急務と考える。具体的には、①まず、三鷹で光学関連の機器開発を本格的に開始し、②純増により天文学、天文工学の人材を確保、③機器開発費の取得、というステップが現実的であろう。又、Hawaiiと国内本部(三鷹+国内観測所)との関係でいえば、機器のR&Dは国内で行い、Hawaiiでは天文学とJNL Tの運用に携わる。JNL Tの維持・運用と機器開発を一つと行うことは困難だろう。その意味でも、三鷹に光学関連の機器開発チーム養成のためのタネを今から植え付けるべきだ」と提案した。舞原氏は「7.5m鏡でなければできないIR天文学を目指し、開発のための共同研究を組織化する必要があるが、現状では、光学赤外線専門委等が中心になっての振興策、行政指導の実施が有効。又、NAOから概算要求する前の段階で大学/関連研究者の意向をきく過程を経よ」と述べた。稲谷氏は野辺山での経験を基に「開発には天文学者の強力なinitiativeが必要不可欠。原理の提案、概念設計、要素技術の積み上げのためには高くても授業料を

払うべきである。又、開発にとっては、望遠鏡が近くにあることよりも、いかに望遠鏡の事をよく知っているかの方が大切」とのコメントをした。又、前原氏は「JNL Tの練習台を意識し、岡山の機器のgrade-upを計りたい。岡山を、国内における装置開発の一つのチームに仕立てたい」と述べた。

【まとめ】

今回のWSでは、以下のような視点や提案が議論された。

(i) 共同化に必要なシステムや環境及びそれらの作り方に関して。

- ① 各人が、より厳しい目で自らのテーマを見直し、JNL Tとの関わりを意識することが出発点。
- ② 体制をいじっただけでは人材は集まらない。必要な人材の確保、工学部や教育系にいる人々の取り込みや地方研究者の参画(個人研究との関わり、職務専念義務の問題など)、若い人材の養成(大学院教育、PDFの受け皿の用意や環境整備など、若手への動機付けと育成)のための具体的検討の開始。
- ③ ソフト・機器開発への寄与を積極的に評価し、人事選考にも反映させていく状況の実現。

(ii) 機器開発の場所と国内観測体制に関して。

- ① 頭脳と判断力を持つ人材の確保と養成。
- ② 国内に既存の研究部門及び観測所の役割の整理と再編成を行い、機器開発体制の確立のため、国内本部の強化と集中を計る。まず、光学関連の機器開発に専念するチームを早急に三鷹に編成する。この場合、JNL T完成までの光学観測天文学をどうするか、という観点からの議論も同時に行われなければならない。
- ③ 開発・研究のための共同研究の組織化。(NAOで集中的にこなすのはどの部分か、あるいは、NAOでやりきれない部分をどうするか)
- ④ 現在走っている観測所の有効利用。

これらについて更に議論を進めたが、具体的な結論を出すには至らなかった。今後体制WG等で検討することとした。

【Appendix】 「OSDA」について、京大宇物での議論検討の結果指摘された問題点や疑問などが能丸氏により紹介された。(別掲資料参照)

(文責・関)

## 体制WGの1989年度活動への提案

上記WSの【まとめ】にある項目の内、とくに(i)② および(ii)②+③ に付いて、実質的な議論を行う。

XIII. 国立天文台内 望遠鏡WG 会合記録 (11)  
(7月までは東京天文台)

- 第183回 1988年5月25日 ハワイ報告, 概算要求作業報告  
第184回 6月1日 技術検討会報告, シャックハルトマン実験解析状況,  
事務作業会状況報告  
第185回 6月15日 概算要求作業報告, 山麓山頂通信施設, 観測器  
第186回 6月22日 光天連報告, ヨーロッパの望遠鏡・観測装置調査, 岡山観  
測所でのシャックハルトマン鏡面検査の実験観測の報告  
第187回 6月30日 概算要求書作り, ACOSVの移植作業, トラス構造, 主  
鏡検査用ヌルレンズ,  
第188回 7月6日 鏡面研磨の専門家スコット氏との懇談会報告, 宇宙科学研  
究所の1.3m赤外線モニタ, 岡山188cm望遠鏡によるシ  
ャックハルトマンテスト, 概算要求書向けのQ&A,  
第189回 7月13日 波面収差と鏡面誤差, 旅費概算のための模擬プロポーザル,  
ヌルレンズの最適化  
第190回 7月20日 鏡筒トラスの解析, 英国-E S O望遠鏡調査速報  
第191回 7月27日 広視野検討会に向けて, 風圧測定  
第192回 8月3日 広視野検討会のまとめ, 望遠鏡・ドーム関係のまとめ,  
岡山シャックハルトマン実験-II,  
第193回 8月31日 概算要求関係, IAU報告, 観測シンボ報告, 技術検討会  
に向けて, 各天文台からのニュース紹介  
第194回 9月14日 J N L T観測装置のデータ量, 鏡面研磨調査報告, 機関特  
定研究の課題  
第195回 9月28日 ハワイユーザースミーティング報告, C F H T風圧測定  
第196回 10月5日 堂平での鏡面洗浄蒸着実験, 仕様の見直し  
第197回 10月19日 堂平シャックハルトマン観測  
第198回 10月26日 鏡材関係海外調査, 風圧測定テスト(ハワイ便り), 光学  
設計, 光学赤外系の将来計画  
第199回 11月2日 特殊蒸着  
第200回 11月9日 ハワイサイトテストまとめ, 光学赤外線実験開発センター  
第201回 11月16日 マイクロレンズアレイ, J N L Tシンボに向けて, 光学設  
計の問題点  
第202回 12月14日 風圧実験, 主焦点補正系第2・第3レンズの非球面量 II  
第203回 12月21日 赤外線広視野撮像

原則として水曜日 16:00 - 18:00

前回の報告は会報49号p8にある.